

哲学するということ

—— 日本原文化への問い ——

梅原 猛

京大哲学科の学生諸君が編集している雑誌に、何か書いてほしいというのです。私も京大には非常勤として長年出講している上に、かつて藤沢令夫氏などと共に、大学院時代に「道程」という同人雑誌を発行していたのでそれに対するなつかしさもあって二つ返事でお引受けしたのですが、実は少し後悔しているのです。なぜなら、私はもう長い間、いわゆる「哲学」の論文らしい論文を書いていません。私が、今書いているものは、いわゆる「哲学」よりは、はるかに多く歴史や文学に属するものでありましょう。しかし、この国では、本籍のように、出身学科や、今の大学でのポストが重んぜられるので、私は今でも哲学者と名のっていますが、とっくの昔に、哲学者ではなく、歴史学者あるいは文学者になっているのかもしれない。そういう私が、今更、若い学生諸君のように、西洋の哲学者の学説について、精密で正確な研究論文が書けるはずはありません。

そこで、私は、私が現在哲学というものについて、どう考えているかを、今の私の仕事との関連において語りたいと思うのです。

「この『序説』は生徒の用いるためではなくして、将来の教師のために書かれたものである。そうしてこの人々も、既に学問の講義を準備するためのものではなく、かえってこの学問そのものを始めて発明するために、この書を用いなければならない」(カント「プロレゴメナ」)

この有名な言葉を、私をはじめで原典で読んだのは、私が、京大へ入学した昭和二十年のことですが、この言葉はそれ以後、ずっと、私の人生を支配していると思います。

哲学というものは、けっしてすでにでき上がった過去の学説を学ぶことではなく、自ら、哲学すること、つまり、自己の理性を働かせ、学問そのものを発明することである、というのは以後の私の人生のモットーでした。私は最初からある哲学者の教説を、そのまま、真理であると信じ、そこに一つの秘教的集団を作ったり、あるいは、自己の仕事を、西洋哲学の研究紹介に限定したりすることを、哲学の道とは考えませんでした。そして、カントのいうように、自らの理性を行使して、新しい学問を発見することが哲学することであると思ってきました。

しかし、自分で、新しい学問を発見することは、容易ではありません。

私が、カントの言葉のように、学問を発明し、単なる哲学の生徒ではなく、自説を語る一人の教師になったとの自負を少しでももつことができたのは、私が、日本古代のことを研究し、いわゆる「梅原古代学」と称せられる学問を創造してからで、年令として、45才を越えてからです。

カントの言葉を知った時から、すでに、25年がたっていますが、私が、自分の学問を創造したと思うことの出来た学問の領域は、その時には、自分がいつかそういう学問をするとは夢にも思わなかった領域においてであります。当時の私は、哲学科一般の学生諸君と同じように、もっぱら、ヨーロッパ哲学に憧れ、日本の思想や、文化を研究することなど、全く価値のないことであると考えていました。

従って、創造的な学問といっても、これはあくまで、西洋哲学の正統的な伝統の上にある学問であるべきであり、人生とは何かと世界とは何かという普遍的な問題を問題にするべきであると思っていました。私が最初にとっくんだ哲学の問題は時間の問題でありました。

アウグスチヌスがいうように、時間というものは誰でもよく分っていると思っているが、それを問われた時に、全く分からなくなってしまう不思議なものです。それゆえベルグソンにしろ、ハイデッガーにしろ、時間の概念を通じて新しい哲学を創造しました。

青年の私は、このような時間に眼をつけて、時間論を中心に一つの哲学体系を創造することを計画しました。私は、何年かこの計画に熱中しましたが、この計画は失敗しました。その失敗の理由はよく分るのです。それは、ベルグソンはベルグソンとして、ハイデッガーはハイデッガーとして、彼等の生命あるいは実存から自ら噴出した語るべき哲学をもって、それが、彼等の新しい時間論となってあらわれてきたと思いますが、当時の私には、自ら思想が生命あるいは実存の中から噴出するという状態の中にはありませんでした。私は、無理に新しい哲学を創造しようとしていましたが、そういう形ではけっして、新しい学問なるものは生れません。

一つの新しい学問が生れるのは、それには多くの準備が必要です。そして、それも無理に作ろうとして出来るものではありません。長い苦悩や遍歴の後に自ら生れるものであると私は思うのです。

たしかに、青年時代の私と、今の私とは、哲学を学問の創造であると考えerる点は同じであるとしても、その学問の内容は、かなり変わったものになりました。それゆえ、青年時代の私に、今の私は多少の弁明をしなくてはならないのです。

今のお前の学問は、いかにして哲学であるか。また、それが哲学でないとしても、お前が学んだ哲学というものは、お前の学問のどこに生きているかと。

この問いは、私は二重に答えるより仕方がありません。一つは、過去15年やってきた私の古代学なるものにおいて、私はどのようにして哲学者であったかということとこれから私がやろうとしている学問においてどのように哲学者であるかということです。

過去の私がしてきた古代学についてはすでに私はしばしば語りましたので、今それをくり返そうとは思いません。

たしかに、私は、7、8世紀の日本の文化や歴史について、今までの学者が思いもよら

なかった新しい説を出しました。その説は、もちろん、多くの反論を呼びましたが、私はやはり、それは、その本質において多くの真理性をもっている、少なくとも、今まで真理として通用していた説よりはるかに多くの真理性をもっていると思います。

自然科学においてもそうですが、人文科学において絶対の真理などというものはあろうはずはありません。正しい説というものは、結局、今まで解明出来なかった現象を、簡単、明瞭に説明しうる仮説にすぎません。もちろん、その仮説に、矛盾する事象があれば、それは正しい説とはいえませんが、今通用している説以上に簡単で、明瞭で、しかも事象を矛盾なく説明しうる説が、他日、生れないとも断言出来ないのです。

その意味で、私の記紀論や、法隆寺論や、人麿論を私は、今のところ正しい説であると考えていますが、こういう説を、いって見れば、日本古代研究にかんして、それまでは全く素人にすぎない私がどうして見出したかということです。

これは、私は、哲学的精神のおかげであると思います。なぜなら、哲学的精神は二つの特性をもちます。一つは、根源性と体系性ということです。

根源性というのは、あくまで、真理を求めていく精神であります。ある学説が、それがどのような権威ある学者によって主張され、どんなに長い間、真理とされようが、それが本当に正しいかどうかを理性によって問いつめていく、そして、その根拠が、少しでも不確実であったら、それを疑ってゆく、懐疑と、その懐疑の果ての、確実な根拠の発見ということが、ソクラテスやデカルトの教える哲学の方法です。

そして、もう一つが、総合性ということです。哲学的精神は、ものを広く見る精神です。専門科学というものは、一つの領域について精密で確実な認識を与えてくれるものですが、しかし、それはややもすれば狭い視野にとらわれて全体的状況を見失うことがしばしばあるのです。哲学的精神は、そういう個別科学のとらわれから認識を解放し、全体的視野の中で事象を見ることを教えるのです。そういう全体的視野において事象は全く今までとちがった相で現れることがあります。

日本についての、特に日本古代についての今までの認識はそういうふうに伝承と、とらわれの中にあっただと思います。明治以来の日本の古代学も結局江戸国学の伝統のうちであって、無意識のうちに江戸時代の国学者、契沖、真淵、宣長の眼で古事記や万葉集を見ていたと共にまた、あまりに専門分野に分かれすぎて、総合的視野を欠き、江戸国学者の認識を全体として問う視野を開くことが出来なかったのです。

私の古代学なるものは、結局そういう根源性と総合性という哲学的精神をもって、日本古代を研究した結果、江戸国学のもっている視点の誤謬に気づき、より確実な根拠のもとにより総合的な学問をつくったにすぎないのです。

まあ、7、8世紀についての過去の私の古代研究については、これ以上語る必要はありません。ここではこれからの私の研究について語りしたいと思います。

今、私は一つの研究に夢中になっています。それは日本の原文化の研究です。というのは、私は長い間、日本のことを研究してきました。私が西洋哲学の研究から、研究の対象を日本の思想や文化に変えたのは、私の35才の時であり、日本古代研究に入ったのは45才の時ですが、その間、ずっと私の頭には、日本とは何か、日本文化とは何かという問いが

ありました。

しかしこの日本とは何か、日本文化とは何かという問いは容易に答えられる問いではありません。これは、日本あるいは日本文化の全体を知らなくてはなりません、そういう全体を知る事は決して容易なことではありません。

今までも、日本とか日本文化についていろいろ語られてきました。しかし、私の見るところ、そのほとんどすべては、日本、あるいは日本文化の一つの現象の一つをとらえて、それを日本あるいは日本文化全体に及ぼしたにすぎないように思うのです。

たとえば、京都哲学の創始者である西田幾多郎先生も、晩年そういう問いを真剣に問われました。そしてその結果、先生は一つの結論を見出されました。それは、西洋の文化は有の文化であり、日本の文化は無の文化であるということでした。しかも、この無は、有と対立する相対無であってはならず、有と無を超越した絶対無でなくてはならないというわけです。

このような考え方は、西田先生の哲学と深く関係をもつものでありましょう。先生は、一方でヘーゲル哲学の影響を深く受け、一方で禅の体験を通じて、一つの絶対無の哲学を作られました。その哲学が、どんなに深淵であり、どんなに当時哲学青年であったわれわれを魅惑したかは語るまでもないと思いますが、そういう、哲学を通じて先生は日本文化を、無の文化と規定したわけであります。

私は、学生時代から、このような考え方になれ親しんできましたが、日本研究が進むにつれ、このような考え方に大きな疑問をもつようになりました。なぜなら、それは、結局、禅、あるいは、仏教の考え方を中心として日本文化を理解するものです。こういう考え方をとるとき、無という思想を強調する仏教、特に、禅仏教を日本文化のエッセンスと見なさねばなりません、はたして禅が日本文化のエッセンスであり、禅によってすべての、少なくとも、大多数の日本の現象が説明できるでしょうか。西田先生の友人の鈴木大拙先生は「禅と日本文化」という名著で、禅によって日本文化を説明し、禅あるいは日本文化を外国に紹介するという点で大へん大きな仕事をされましたが、その本を読んで私は、強い疑問を感じました。鈴木先生は、能や俳句をすべて禅から、従って無から説明されていましたが、これは一面的見方であると思います。能にせよ俳句にせよ禅で説明できないものがあまりに多くあります。だいたい12世紀に日本に移入され、主として武士階級に多少の影響をもつものの、けっして、日本人全体の宗教にならなかった禅仏教でもって、日本文化全体を説明するのは、はじめから無理な話ではないでしょうか。

私がこういう考え方に疑問を感じるのは、この点ばかりではありません。そういうふうに西洋は有で、日本は無というふうに、簡単に概念化することがどんな意味があるのでしょうか。一つの文化が、そんなに簡単に有だとか無だとか割り切れるものではありません。一つの文化は全体として文化体系をもちます。そして一つの文化の特性を論じるのは、そういう文化系全体を把握しなければなりません。

いわゆる京都哲学の生みの親である西田幾多郎先生や、田辺元先生はたしかに東洋や、日本の思想に強い関心をもたれました。この点、ほとんど東洋や日本の思想に関心を払わなかった他の多くの日本の哲学者より先生方ははるかに主体的で創造的でした。そして先

生方の無の論理は東洋思想、特に禅仏教からえられたものでした。つまり、西洋の哲学と、東洋の仏教の接合の中から、先生方の哲学は生まれました。それはそれで意味のあることですが、先生方は一度も、日本文化を全体として学問の対象とされなかったように思うのです。つまり東洋、あるいは日本思想は禅で十分で、それとヨーロッパ哲学を総合させればよいというわけです。

そこから無の哲学が生まれ、無の哲学の上に立った日本文化論が作られたわけですが、私は、そういう文化論を根本的に否定しなくては、日本について何一つ、真面目な研究が出来ないと思うのです。日本の文化がはじめから無であると分っていれば、それ以上研究する必要はないではありませんか。

これは先生方の哲学の体系全体にかんすることですが、私はもっと事象を正確に見るべきであると思うのです。日本文化を全体として正しく考察し、その上で日本文化論を立てるべきであり、自分が体験的に偶然見つけた一つの宗教の概念で日本文化全体を説明し、あまつさえそれをもって西洋文化とのちがいを規定するのは本末転倒のように思います。

このように偉大なる先生方の学説を批判したとしても、私自身がこのような日本文化全体の事象に即した考察を通じて日本文化の根源を明らかにするというを多少でも可能にしたというささやかな自負をもつには長い年月が必要でした。

それは大へんむつかしい問題であるからです。従来日本文化とされている多くのものは、実は、日本独自のものというより、多くは、インドや中国、あるいは朝鮮から移入されたものです。たとえば先の禅がそうです。禅をもって日本文化の独自性を考えようとする時、それが日本文化の独自性ではなく、中国文化の独自性ではないかという疑問が帰ってきます。西田先生にも、鈴木先生にもそういうところが多少あまいです。ですから無は東洋文化の特性でもあり、また日本文化の特性でもあるというわけであります。しかし東洋といっても、中国とインドは大へんちがうし、また日本と中国も一見よく似ているようで、その間には大きなちがいがあります。無というのが、ただ日本ばかりか、中国もインドも含めた東洋の文化的特質でしょうか。それは、日本に限られるのでしょうか。

その所があまいですが、従来の日本文化論なるものは、日本文化の、いくつかの特質を、西洋文化との対比によってピックアップしたもので、こういう点が、実に、いいかげんであったと思います。

日本文化の特性を規定するにはあくまで、歴史的事象の総合的にして正確なる考察の上に立たねばならないのです。歴史的事象の総合的にして正確なる考察の上に立って、日本文化を眺めると、確かに、日本は一つの特異な文化をもった国であることが判るのです。

私は今このように日本文化を規定することが出来るのではないかと思います。日本は高度に発達した狩猟採集文化をもった社会が長く続いた国であるということです。というのはこういうことです。

日本のもっとも古い土器は、カーボン鑑定の結果、マイナス1万2千年ということとなり、今のところ世界で発見された土器のうちのもっとも古い土器であります。このことは実におどろくべきことであると思います。従来、文明の発生地と考えられていたメソポタミア地方のもっとも古い土器が、マイナス8千年です。日本の土器は、それより、実に4

千年も古いことになります。そして、文明の発生地を、メソポタミアと考える常識をまぬがれがたかった、多くの日本の考古学者は、容易に、この科学的鑑定の結果を信ずることが出来ず、日本のもっとも古い土器は、マイナス5千年位であるとしてきました。まあ、メソポタミアを土器の源流とすれば、3千年くらいたって、日本に土器が達したろうというわけです。

しかし、その後、別な鑑定の方法も、見出されまして、どうにも、この年代を否定できないものとなりました。また、この古い縄文土器とよばれる土器は、その後も日本列島の到る所で引続き作られ、その量及び、その質の変化においても、少なくとも土器文化で見る限り、この極東の一隅に、はなはだ高い文化があったことを否定できないようになりました。

この縄文土器が、芸術的に大へんすぐれていることを宣言したのは岡本太郎であります。その後、発掘が進むにつれ、この縄文文化が、狩猟採集文化としては、技術的にも、精神的にも、大へん発達した文化であることが徐々に分ってきました。

私もすでに、10年ほど前から、この縄文文化に着目し、この文化を解明しようとしていました。なぜなら、この、紀元前1万2千年という、とほうもない過去に始まり、紀元前3世紀、水稻農業と金属器をもって、日本に渡来した種族が、この国を、農業国化し、やがて、一つの国家を形成し始めるようになるまで、実に1万年も長い間続いた文化が、その後の日本文化を根本的に規定していないはずはないからです。

われわれは、仏教渡来以前の宗教を神道と考えます。そして、神道なるものは、悠久の昔から、日本人が伝えてきた宗教であると考えられてきました。しかし、神道といわれるものの中には、多くの外来宗教—仏教や、特に道教の影響があります。私はすでに、このような研究をはじめの前、日本の古い神道であり、神道の本質のように考えられていた、ハライ、ミソギの神道が、実は道教の影響を受けた、7、8世紀の律令社会の産物であることを指摘しました。しかし、こういう、仏教や道教の影響やその後の変化を引き去ってもこの神道、特に、その儀式の中に、古い日本の宗教を含んでいないでしょうか。一体神道というのは何でしょうか。

私は、この神道といわれる古い日本の宗教儀式、あるいは、この儀式の中にこめられている思想の中に、古く縄文時代から伝わる宗教儀式と、それをうらづける思想がふくまれているのではないかと思ったのです。

とすれば、何とかして、この日本文化の原像をなすと思われる縄文時代の宗教思想を知るすべはないものか。

私は長い間、こういうことを考えていましたが容易に、それを解決する鍵を見つける事が出来ませんでした。

なぜなら、これは、到底、文献歴史学によっては、不可能です。われわれが、今持っている最古の文献は、7、8世紀のもので、7、8世紀にかかれた史書である古事記や日本書紀も、7、8世紀をはるかにさかのぼる古代のことについて、多くの情報を与えます。しかし、これはあくまで、7、8世紀の政治的支配者によって作られた歴史書であり、歴史の編集というものが、政治的支配者の権力の安定というねらいをもっている以上、どれ

だけこの史書の語るところが真理であると断定出来るかも知れないのです。また、このような歴史書、特に古事記に、宗教書の意味をもち、そこに一つの神道思想が見られますが、これが、律令時代に適合した新しい宗教ではなく、古い日本の宗教をそのまま伝えているという証拠が全くというほどないのです。

記紀によって、ある程度、7、8世紀以前の日本の歴史や、宗教について理解することが出来ますが、とても、それだけで、縄文時代までさかのぼる日本の原文化、原思想を抽出することはできません。

先にいったように、戦後の考古学は、めざましい発展をとげ、縄文時代についても、単なる住居遺跡ばかりではなく、明らかに宗教遺跡と思われる大規模な遺跡を、続々発見しました。しかし、考古学は、もとより、物の学問であります。それは、ふつうの人間の日常生活の遺跡ではないと思われる遺跡があると宗教遺跡といいますが、それが、どのような宗教であったか、縄文人たちはどのような世界観をもち、神々をどのように考え、何を神々に祈ったか、そういう問題は考古学の問題ではないと考えています。

また、考古学とならんで、民俗学の発展もいちじるしいのです。柳田国男と折口信夫という、二人のはなはだ個性的な学者によって始められた日本民俗学は、日本人が無意識に行っている宗教儀式的意味を明らかにし、仏教であると思われていた多くの宗教儀式が、仏教ではなく、仏教以前からある、宗教思想の産物であることを教えてくれました。

おそらく、日本の原文化、原思想の問題を考えるには、民俗学の助けが必要でしょうが、しかし、それかといって、この民俗学の明らかにする宗教思想に一つの体系を見出すのは容易ではなく、またその儀式なり、思想なりが、どれだけ古くさかのぼることが出来るかを判定するすべはないのであります。

私は、長い間、このような学問の現状の中で、日本の文化、思想の源流をなす縄文時代の日本人の文化や思想、つまり、日本思想の原点を明らかにすることは不可能であると考えていました。

しかし、今はこの鍵を私は見つけることが出来たと思うのです。この鍵というのはアイヌ文化であります。

アイヌは、倭人と同じく、日本列島に住む、一種族です。従来は、このアイヌなる種族は大多数の日本人がそれに属する倭人と、全く別な人種であって、従って、その言語もその文化も、その宗教も、全くちがうものと考えられていました。

従って、この文化は、われわれと全く関係のない未開人の文化であり、それを研究することは、何の意味もない、好奇心を満足させるにすぎないものと見られていました。金田一京助などの研究は、所詮そういう研究態度の上に、成り立っているのです。

ところが、よく考えると、このアイヌは、最近まで、狩猟採集生活をつづけてきた、きわめて宗教性の高い文化を持つ民族です。しかも、このアイヌは、徳川時代まで、蝦夷とよばれていましたが、蝦夷といえば、記紀をはじめとする日本の史書に、しきりに出てくる、古墳時代においては少なくとも、愛知県以東に、そして、律令時代においても、東北地方にいて、その古い狩猟採集の生活様式を改めず、大和朝廷の支配の下に入るのをいさぎよしとしなかった種族のことをいうのではないのでしょうか。

たとえ、アイヌは蝦夷と同一ではないとしても、それらは深い関係を持ち、また蝦夷が縄文時代の日本人の原形を深く宿すものではないでしょうか。従って、縄文時代の日本の文化を研究するには、アイヌ文化の研究が、必要かくべからざるものではないでしょうか。

そう考えるのが、理性の必然であると思いますが、それとは、全く別な考え方が、長い間、日本の学界の常識でした。私が調べたところ、このような常識は、そんなに古いものではありません。徳川時代この蝦夷地、すなわち北海道へ行き、親しく蝦夷すなわちアイヌと交った近藤重蔵や村上島之丞は、この蝦夷文化は実は日本古代の文化で、アイヌ語は日本古代の言語の面影を多くとどめるものであると考えていました。

そして明治の終り頃、金田一京助がアイヌ研究に入った時は、まだこのような考えがどこかにあったのですが、やがて研究が進むと共に、この二つの文化は全くちがうということになりました。これには児玉作左衛門の人種理論と金田一京助の言語理論が決定的な影響を与えていますが、明治の末年から、日本の国家主義的思想が高まる中で、日本人を天孫民族とする考え方が強くなり、懸命になって欧米の文化国家の仲間入りしようとする日本人とアイヌのような原始人と同一種のものだとする考え方が、無意識のうちに抑制されたにちがいないのです。

人間の偏見というものは、恐ろしいものです。おそらく金田一京助が、もしもアイヌと日本人の同一性を主張し、アイヌの宗教が日本の神道の原形であると主張したら、金田一京助は国家主義的思想家によって告発され、失脚したにちがいないのです。こういう時代において、人間は容易に危険な真実より安全な誤謬をえらぶものです。しかもそれはほとんど無意識のうちにやられるのです。

私がアイヌの文化を日本の原文化の遺物ではないかと考えたのは、たとえばアイヌ語で神あるいは霊をあらわす言葉、カムイ、ピト、ラマト、タマ、イノツ、クルの6語が、日本古代における同じ種類の言葉、カミあるいはカム、ヒト、ラマ、タマ、イノチ、クルなどと同じ発音と同じ意味をもつという藤村久和氏の指摘によってであります。

アイヌもはなはだ宗教を重んじる種族であります。そしてその宗教を先祖代々伝えてきた宗教であると思っています。古代日本人もまた宗教を重んじた種族であります。記紀が古い日本の時代を神代としていることは大きな意味があります。それは、人間が神々と密切に交流し、人間も神であった時代であるということです。アイヌの世界はごく最近まで神代であったことは否定できません。

このような宗教をその社会の根本原理とする二つの種族の間で、それぞれ神をあらわす言葉が全く同一であること、そういうことが全く人種的にも言語的にも文化的にも関係のないとされている二つの種族の間に起りえましょうか。

私の疑問はそこから始まり、少しずつアイヌ語を勉強し、金田一さんなどによって記述されたユーカラなどをよんでみました。その結果、私は日本語とアイヌ語は発音において、意味において、文法において、いちじるしく類似し、しかも類似の言葉は移入語がはなはだありにくいとされている動詞や助詞に多いのが分りました。

そして同時に、そういう二つの種族を人種的に言語的に全く関係のないとした児玉さん

や金田一さんの理論に根本的な誤りがあることが分りました。

人種理論については、東大の埴原和郎さんをはじめとする自然人類学のはなはだ詳細な研究があります。それらの人類学はアイヌが、児玉さんや金田一さんが考えたように、コーカソイドすなわち白人ではなく、われわれと同じモンゴロイドすなわち黄色人種であり、しかもそれは古いタイプの黄色人種であり、倭人の東北人に近く、近畿人に多い新しいモンゴロイドとは違うことを明らかにしました。

金田一理論の人種学的基礎は明らかにまちがっていたのです。とすれば言語学の側面もまちがっているのではないのでしょうか。この金田一京助の言語学的理論のまちがいについて私は中央公論に書いておきました。それについて同じ中央公論に反論が出ましたが、この反論はずいぶんひどいものです。無知と、しばしば無知の友人である傲慢だけが特徴のこの反論に再び反論を加えるのは大へんたやすいことですが、私の再反論を一つの創造的な論文にすることを、この夏休みの仕事としたいと思うのです。

ちょうど15年ほど前私が古代研究をはじめた時、日本の歴史学や文学について全く新しく勉強をはじめたように、今はまた全く新しく言語学や国語学をはじめから勉強しなくてはならないのです。もうすぐ私も60歳です。まだ15年前は新しい学問をはじめの精神的あるいは肉体的力を十分もっていましたが、今はどれだけやる事が出来るか、いささか心もとない気もしますが、やはり自分でやるよりは仕方がないのです。自分の理論は自分で作るより仕方がないのです。私が日本文化の原点をさぐる仕事において、アイヌ文化に出会い、そこに言語の問題を見出した以上、やはり六十の手習いを始めるより仕方がないのです。

ここでは十分語れませんが、この点において私は十分の成算をもっているのです。二つの言語が同一の言語であり、アイヌ語の方は縄文時代の言語の面影を多く保存するのにたいし、日本語の方は、弥生時代以後の人種的混合と、外来文化の移入のために相当な変化をとげたものであるという説はほぼ間違いないように思うのです。

問題はそれをどのようにして証明するかであります。私が歴史のことを書き始めたとき、ある先生は、私の著書をよんで、ここで結論は正しいが、証明の方法がまずいといわれました。今同じことが私の言語に関する論文についていわれると思いますが、私の研究が学問であるためには、やはり現代一番進んだ言語学を学ばねばなりません。それには、少し時間があると思いますが、やりとげたいと思っています。

こういうことを語っているときがありませんが、結局、私は次のことをいいたいです。

私は哲学を一生の仕事としましたが、私は世界とは何かとか人間とは何かという一般的な問題を問うより、日本人とは何か、日本文化とは何かという特殊な問題を問う道をえらびました。

それは、そういう一般的な問題が私にとって解決不可能であったことにもよります。もしも、哲学というものがそういう一般的な問題を問うことに限定されるならば、私はもう哲学者であることを放棄したことになりますが、この国において、こういう特殊な問いを問うことの方がはなはだ創造的であると私は考えたのでした。

なぜなら、一般的な問いのもとにたてられた日本人の哲学なるものが、どうしようもなく日本的であることは先の西田先生などの例に明らかであります。ヨーロッパにおいても、ヨーロッパ的であることがすなわち普遍的であることを素朴に信じたヘーゲルなどの19世紀の哲学者とちがって、ハイデッガーやヤスベルスなどの20世紀の哲学者はしきりにヨーロッパとは何か、ヨーロッパ文化とは何かを問います。ハイデッガーが自己の存在論をヨーロッパの生んだ技術文明とのかかわりにおいて考えたのも、ヤスベルスがヨーロッパ哲学がその一部をなす雄大な世界哲学史を構想したのも、そういう思想の風潮においてであります。

そういう問いは、今後世界を指導する哲学がはたしてヨーロッパ哲学であるかどうか、あるいは、そうあってよいかどうかという深い反省の中から出てくるのであり、もちろん彼らは、今後の世界を指導する思想としてヨーロッパ哲学が大きな役割を演じるという信念を失っていませんが、ヨーロッパ哲学だけではないし、またそうあってはいけなないと考えています。とすれば、非ヨーロッパ世界の住民であるわれわれは、われわれ自身の、文化の源流を深く反省し、そのような文化の源流が、今後の世界にどのような意味をもつかを明らかにすることが必要だと思うのです。

私の今の仕事は、そのような課題に答えようとするものであります。

そして、それに答えるにはやはり哲学のみであると思います。正にそこにおいて哲学的認識の根源性と総合性という機能が十二分に活用されるべきであります。

ここで特に後者の機能が必要であります。哲学は総合知であります。こういう知の性格によって、アリストテレスは多くの学問をはじめたわけです。万学の女王としての哲学、これは、正にアリストテレスにおいて、その性格を遺憾なく発揮されたといえましょう。

近代において個別科学が発達し、18世紀においては、カントがいうように、万学の女王としての哲学の位置が危くなりました。カントの哲学は批判という理性の武器によって、失われた万学の女王としての哲学の位置を回復しようという試みとも考えられますが、カントの流れをくむヘーゲルは正に文字通りエンチクロペディーなる書物を書き、彼の弁証法によって全科学を包摂する哲学体系を構成しました。これこそ正に万学の女王の王座復権をねらったものでしょうが、この王座復権が、実際には、この女王のもとに、弁証法なる論理の下に無理に諸科学を従属させたものであることは、その後の多くの人達によって批判されたところでした。

総合知としての哲学、そういうものは不可能でありましょうか。たしかに哲学はもはやすべての認識をそれ自身のなかから生み出すというような時代ばなれのうぬ惚れをもつことは出来ません。

しかし、それにもかかわらず、総合知としての哲学の要求はそれ自体、必然的なもので、そういう知が今日でも尚且つ、多分に必要とされているのであります。今私が明らかにしようとしている日本文化の源流についての認識はそういう総合知なくしては不可能であります。そこでそれについてのすべての学問、自然人類学、言語学、歴史学、考古学、民族学、社会学、宗教学がアイヌ語と沖縄学の助けによって、総合される必要があります。

もしも私の認識が正しいとすれば、こういう科学は統一的に、かつて日本にあった文化

の残像をそれぞれ、それ自身のジャンルにおいて、はっきりと伝えているにちがいはありません。

その残像を集めて、一つの体系に綜合する、それはどうしても哲学的認識の仕事であります。それはある意味ではアリストテレスやヘーゲルが行なおうとしたことの再現であります。

今私はこのような仕事をあえて行なおうとしているのです。その成果は次々と発表してゆくより仕方がありませんが、結果的に私が行なおうとしているのは次のような問いであります。今いささかの研究によって、私には少しずつ明らかになってきたことがあります。それは天国の成立ということであります。天国というのはもちろん、キリスト教のみのことではありません。日本の古代の宗教にも、アイヌの宗教にも天国への信仰があります。

人間が死ぬとその魂はしばらく近くの山に止まり、やがて昇天するというものであります。しかもこの昇天した魂がもう二度と地上においてこないのではなく、お盆や彼岸など時々人間界へ入ってきて、子孫達と交わり、また天国へ帰ってゆけど、しばらく時がたつと、その魂はまた肉体をとって子孫となって地上にやってくるという信仰です。

一種の永却回帰の信仰ですが、この信仰が私は日本人の魂の源流にある信仰であり、日本の宗教行事のほとんどすべてを説明する思想ではないかと思うのです。あの日本の宗教行事にかくべからざる魂送りの行事がそういう意味の宗教的行事であることはもちろんとして、日本になぜ浄土教が流行し、なぜ日本の仏教がすべて葬式仏教となったかは、こういう理由によってはっきり説明できると思います。

しかしおそらくこの魂送りの行事においても、縄文あるいはアイヌのそれと日本人のそれはかなりちがっているのではないかと思います。

縄文あるいはアイヌにおいては、動物の魂送りが中心なのに、日本人では人間の魂送りが中心にあるのです。そこらへんにちがいはありますが、その共通の信仰は否定されるべくもありません。

こういう魂送りの背後にある哲学は何か、それは現代世界においてどういう意味をもつのか。

私は人類の文明を西洋文明をこえて、あるいは、また、農耕牧畜文明をこえて考えることが必要だと思えます。私の今の仕事はそういう問題に答えようとするものですが、その評価は後世にまかせるべきだと思ふのです。